

元TBSアナウンサー **下村 健一氏** (高校31期)

1985年 1浪1留で東大法学部を単位スレスレ卒業、TBS報道局アナウンサーに  
1999年 ニューヨーク支局勤務満了を機に退社、1年間の“自主的育児休暇”入り  
2001年~東京大学客員助教 兼「サタデーずぱっと」「NEWS23」取材キャスター  
2010年 メディアを離れ、首相官邸に転職。内閣広報室の中枢で情報発信を担当  
2011年 東日本大震災と原発事故に遭遇、総理執務室で極限の非常時広報に苦闘  
2013年 民間に復帰。慶応大学特別招聘教授などを経て、現在白鷗大学客員教授

## ■エイプリル・フールのような半生だけ

学生時代、若者だらけの選対事務所を率いて、武蔵野市議選最年少候補を史上最高得票数で当選させたり。報道アナ時代、まだ捜査の手も届かぬ殺人犯(のちに逮捕され獄中死)の自宅を極秘取材で訪ね、1対1で対峙したり。1m先も見えない南極の猛吹雪の中を、命綱にしがみついて歩いたり。某女優さんと独身同士の深夜ドライブ中、目の前の車が正面衝突事故に遭い、危うく週刊誌ネタになりかけたり。火山から突進して来る火砕流から、全力疾走でギリギリ逃げ切ったり。大震災の翌朝、まだ制御不能で危機的な福島第一原発に自衛隊ヘリで首相と共に命懸けで乗り込んだり。

———本当にムチャクチャで波乱続きの人生だけど、ここまでを振り返って一番思い出深い日々はと問われれば、僕は迷うことなく「立高時代！」と即答する。

## ■立高の日々が育んでくれた、3つの想像力

70年安保当時の「立高紛争」の史実調査にタブーを破って挑んだ文化祭のクラス展示(今で言う「クラ発」)では、対立する当事者達の証言をどう受け止めるかで、「情報への想像力」を鍛えられた。熱血から無関心まで多様な仲間達を巻き込んでいく演コンや体育祭では、涙と笑いの中で《他者への想像力》を磨かれた。何かと口実を作っては皆で出かけた多摩川の河原や奥多摩キャンプ場では、時には夜通し語り明かして《未来への想像力》をふくらませた。

———あの鮮烈な立高時代は、56才の自分にとって「昔話」ではない。現に今も、僕は全国各地の小中高校を訪ね歩いて、まさにこの3つの想像力を活性化させる特別授業を展開しているから。

## ■情報に・他者に・未来に敏感であれ！

第一の《情報への想像力》とは、すなわち「メディアリテラシー」のこと。インターネットなどで初対面の情報に踊らされないために、『事実かな、意見・印象かな?』『他の見え方もないかな?』…など4つのチェック・ポイントを身につければ、君も Post-Truth 時代の Fake-News をかき分けて、情報の海をきつと溺れずに泳いでいける。

第二の《他者への想像力》は、「想像力散歩」でトレーニング。すれ違う人の服装や様子から、その人の人生を具体的に思い描いてみる。道端の郵便ポストの中に、今どんな物語が入っているんだろうと何通りも想像してみる。そうやって1時間も歩いていけば、他者への眼差しがどんどん豊かになってくる。さらば、無関心！

第三の《未来への想像力》の訓練には、「架空同窓会」が効果的。仲間たちと20年後の同窓会で再会したという設定で、互いの近況を報告し、質問をし合う。現に20年後にいるのだから、「わからない」という返答はあり得ず、必ずリアルに答えねばならない。「どうやってそれを実現した?」「ピンチは誰の助けで乗り越えた?」などと会話を重ねるほどに、未来図は見る見る形になってゆく。そう、君たちの1つ1つの選択の足し算が、「未来」を作るのだから。

———立高体験に根差したこの3パターンのアクティブ・ラーニングを全国に広めて、弱体化しつつある日本社会の基礎体力を固め直すこと。それが、微力ながら今の僕のミッションだと思っている。

## 【現役立高生の皆さんに、ぜひ読んでほしい僕の著書】

- ★岩波書店「10代からの情報キャッチボール入門」(2016年度・児童福祉文化賞 推薦指定図書) → 上記“4つのチェック・ポイント”などを、詳細な事例で解説。高校生にピッタリのガイドブック。
- ★講談社「想像力のスイッチを入れよう」(本稿執筆時点で、Amazon「小学教育」部門1位) 上記“3つの想像力”の小学校授業記録。ページにスマホをかざすと、授業が動画でも見られます！
- ★朝日新書「首相官邸で働いて初めてわかったこと」(3・11を含む、内閣広報室勤務2年間の全記録) 18才選挙権を手にした(orもうすぐ手にする)君たち必読！ 日本一やわらかい官邸内幕本。



原発事故で避難中の、福島・富岡町の仮設小学校で授業をする下村氏。(撮影=講談社)

